

## 現代語「かかる／かける」の素描

## ——本動詞について——

星野佳之

## はじめに

現代語の「かかる／かける」の本動詞について、用法の素描を試みる。多義故に『日本国語大辞典』などが大分類で五、更にその下位に四八もの項を設ける語であるが、これをわかりやすく統一的に記述したものが『基礎日本語』（森田一九七七）である。「それ自体では不安定な状態にある事物が（安定するように）他の事物を支えとして関係してくる。そのような状態に持つて行くことは「かける」という記述から出発するその解釈に、本稿も基本的に賛成であるが、ささやかな追加ができないか、試みたい。考察も基本的に同論の挙げた用例をもとに行う。

## 一 具体的用法

まずは、物理的移動や行動を表す具体的用法について考察する。『基

礎日本語』は、「BニAかかる」というモデルのもと、「重さをBにあずけて位置を固定させる」用法として、次の諸例を挙げる。

〔用例群1〕<sup>（注1）</sup>

- 1 壁に額が掛かっている。
- 2 洗濯物がさおに掛かっている。
- 3 ガス台に鍋がかかっている。
- 4 帽子掛けには帽子が掛かっている。
- 5 屋根に梯子が掛かっている。
- 6 たくさん帽子の掛かる帽子掛け
- 7 岩角に右手が掛かったので転落をまぬかれた。
- 8 川に橋が架かる。
- ア ハンガーに上着を掛ける。
- イ 菜罐を火にかける。
- ウ 相手の肩に手をかける。

先述のように、本稿もこの記述に基本的に賛成であるが、更に「部分性」とでもいふべき特徴を認めてはどうかと考える。具体的には、額

(1) にせよハンガー(7) にせよ、「Aの一部を」Bにゆだねて固定させるのであるが、これは「かかる／かける」にとつて、実は重要な意義的要素なのではないかと考えるのである。例えば選挙ポスターなどに対して「かかる／かける」といわないのは、これが固定のために全面をのり付けしてしまっているからではないか。このように非適格例をふまえて、A全体の重さに対する、それを支える部分の小ささに着目すると、次の諸例もこの特徴を共有することに気づく。

〔用例群2〕

9 ドアに鍵がかかつていて入れない。

10 嚴重に繩の掛かつた行李。

11 太りすぎてボタンが掛からない。

エ 罪人に繩を掛ける。

オ ホックを掛ける。

「動いてしまう状態のAを、Bによつてしっかりと固定させる。」という『基礎日本語』に再び同調したいが、更に先ほどのAを固定する要素の小ささはここでも生きている。11・エの服全体に対するボタン、罪人に対する繩の当然の小ささも理由であるが、「鍵がかかる／をかける」なども同類と考えてよいのではないだろうか。元は「掛けがね」など、器具に由来するかなり具体的な動作から定着していった慣用名のかもしれないが、それでもこの表現が命脈を今に保つ要素の一部に、動きかねない全体に比して、固定のための部分が相当に小さいことが働いているのではないだろうか。こう考える時には、実は〔用例群1〕

との間に微差があつて、例えば例文Aでは、上着(A)の一部を委ねて、上着全体をハンガー(B)に固定するのであるが、

9' ドアに 鍵(A) を かける。

では、Aたる鍵は既に「ドア」の一部であつて、そのドアがAによつて固定される側である。つまりこの場合、ドアは〔用例群1〕におけるBではない。これらの例で二格は、固定される場所を示すのではなく、たとえば11に「…」を補うことは困難である。しかしそれは文上に顕現させにくいだけで、〔用例群1〕風に意味するところのBを見いだすことは可能で、そのままでは落ちてしまふようなズボン(A)が固定される先、則ち胴体とでも言えるだろう。エの「罪人」など更にBを意味的に見いだすことが厄介ながら、それでも自由を奪つて一定範囲から先には逃げられないようにするのであるから、場所的に固定されていると見て間違ひではあるまい。このように〔用例群2〕は1と区別されるところがあるものの、全体の一部を用いてAを固定する点では同じであり、微差という次第である。

こうしてAの一部とか部分とかいう特徴を指摘するならば、次の〔用例群3〕を直ちに説明する必要がある。これは「Bを覆い隠す」(『基礎日本語』)ものであり、一部ならぬ全面が問題となるからである。

〔用例群3〕

12 本にカバーが掛かつている。

13 チョコレートのかかつたケーキ。

14 イチゴにミルクがかかつている。

カ 火燵に蒲団を掛ける。

キ うどんにあんを掛ける。(あん掛けうどん)

ク ごみを埋めて泥を掛ける。

しかしこれらの説明も比較的簡単で、面積の上では全面を覆うにしても、本体と言うべきB(本、キーキ、イチゴ…)に対し、A(カバー、チョコレート、ミルク…)は表面のみを覆う、薄いものでなければならず、大きさの上からいうだけでも、B≧大、A≧小の関係があるものばかりである。かつ、いつでも着脱可能で、決して融合しないという特徴もこの際指摘したい。

ケ 上着を掛けてやる。

などもこの類に入ると思うが、ケは袖を通すことを意味しない。併せて考えるに、これらAとBの関係は、「用例群1」において、Aが「安定するように」Bに身を委ねると同時に、しかしそれはAの一部であるために、依然全体の重さをアンバランスに固定しているに過ぎない不安定と、通底するものと思われる。この「用例群1」の「不安定」に「用例群3」の側で対応するのは、全面をBに委ねることはできて、いつでもBから離れ得る状態にあり続けること、即ち「用例群3」の可動性なのではないだろうか。

だから、自然現象の例である次の例も、この「用例群3」の類と認めたい。

15 一面に霧がかかる。

「かかる」ことができるものは、すぐに晴れるべき「霧、雲、もや…」

などに限られる。「雪」が山一面を覆うこともあるが、風で吹き飛ばされたりしにくいこの場合は「かぶさる／覆う」と言うことはあっても、「かかる」は使いにくいであろう。

ここまでの諸用例群を以上のようにまとめると、次の「用例群4」はいささかタイプが異なる。

〔用例群4〕

16 軒下では雨が<sup>かかる</sup>から、洗濯物を取り込もう。

17 デッキにいると波のしぶきが<sup>掛かる</sup>。

18 工場地帯なので干し物に<sup>掛か</sup>って黒くなってしまふ。

コ 塩を<sup>掛けて</sup>食う。

サ 雨蛙に小便を<sup>掛け</sup>られた。

シ 頭から水を<sup>掛け</sup>る。

主な違いは、「用例群4」が移動動詞の一種だということである。もちろん「用例群1〜3」も、「固定前」から「固定」への変化の際に移動は伴うが、それを表現するわけではない。1の「ている」が進行態でないことからそれは明瞭であると思うが、この「用例群4」では「AがBに向かってきて、Bに当たる」(『基礎日本語』)ことを表すのであり、16「洗濯物に雨が<sup>かか</sup>っている」は進行態として自然に理解することもできる。

さて、移動動詞という以外の「用例群4」の特徴は何か。「BはAに比して強大で、Aの衝突の影響を受けて変化を被ったりはしない」という点を挙げたい。再び非適格例を持ち出してこの特徴を浮かび

上からしてみると、「トラック、石、本……」などはなかなか「かかる」ものには該当しにくいだろう。液体で言えば「雨」(16)「しづき」(17)などが馴染むのであって、「波、津波」などは、新聞等を検索してみても<sup>(注2)</sup>「押し寄せる、襲う、覆う……」などと共起はしても、「かかる」の主語にはなっていない。

この特徴をふまえると、次の例は若干抽象度を増すのであるが、「用例群4」の類例とまとめてよいように思われる。

19 横綱に向かつて掛かつていく。

20 さあ何人でも掛かつてこい。

21 束になって掛かつて、かなわない。

Aが文の上で明示されることは少なく、その意味で「話し手がB側に立つての表現」(『基礎日本語』)であるが、Aが不明ながらもBに対する小ささ、逆に言えばAに対するBの強大さが明らかな特徴となっている。19の「横綱」は言うまでもないが、20・21のように、Bの勝ちを前提とした文脈がよく馴染む表現であろう<sup>(注3)</sup>。

\* \* \*

こうして「用例群1」から「用例群4」まで、抽象的用法はA・Bの大小関係を軸にしてかなりの範囲まで説明できるのではないかと考える。

## 二 具体的用法

その一方、抽象用法はかなり多岐に亘り、全てをA・Bの大小関係で解決することは難しいように思う。但し、一部にはやはりその関わりを見いだせると思われるものがあるから、まずそれを見ておきたい。

〔用例群5〕

22 彼に迷惑がかかった。

ス お手数数をかけました。

「Aの働きかけや作用がBに達し及ぶ」(『基礎日本語』)のだが、「働きかけ作用」が「かかる」の場合はマイナスの事に限定されるように、更にそれは小事である必要がある。「迷惑／面倒／手間／厄介……」は嫌な事ではあるが、日常レベルのことであり、「彼に致命傷、災難、破滅がかかった／をかけた」ということはない<sup>(注4)</sup>。これなども、小事Aが及んだという把握がこの抽象用法に生きているからではないだろうか。次の23・24・セ・ソの例は特に『基礎日本語』が言及していないものだが、これらも同様に考えたい。

23 この一球に選手生命がかかっている。

セ この一球に選手生命をかける。

24 上司からねぎらいの言葉がかかる。

ソ 部下にねぎらいの言葉をかける。

23及びセにおいて、一球が選手生命を左右するとは大袈裟な話だが、

実はこの大袈裟がないと「かける／かかる」は使えないであろうと思われる。現に、「日々の練習と精神的鍛錬と健康管理と競技研究の総体に選手生命はかかっている」と言ってみると、内容は正しいだろうに何とも言いづらい。選手生命とそれを支えるものが釣り合っているからである。また24・ソであるが、これらの類例として「かかる／かける」にふさわしいのは「ねぎらいの言葉、一言、挨拶」程度の片言か、さもなくば「号令」くらいで、「転勤の命令をかける」とかいって、実質的若しくは重要な内容の伝達には不向きである。

また、次の用例群はこれよりはかなり遠いが、それでもまだ繋がりが見いだせるかもしれない。

## 〔用例群6〕

25 九時から仕事に掛かる。

26 いっせいに掛かれ!

「白紙の状態にあるAが、意図的にBに立ち向かうか、または無意識的にBに出会い、Bとかがわっていく状態」(『基礎日本語』)というものであり、このままでAにBと比しての小を見いだすことは難しい。特に25は「仕事」という大でも小でもよいニュートラルな語をBにとっているのであるし、もはや単純な意味でAは小ではない。一方で、その仕事に取り組むこと自体を常に言うのではなく、開始局面を表すことにこだわらなければ、それは則ちBが小さくなっていく前の段階にのみ言及することだから、依然上述の考察につなげる可能性は残されているのかもしれない、と思うのだ。いうまでもなく、これは複

合動詞としての「かかる」に関連を疑うべき本動詞用法であって、時的にはここが本・複合両用法の架け橋である、とも言えれば話は簡単であろう。

## 三 統一的把握の問題点

しかしここで慎重にならざるを得ないのは、主に次の二点があるからである。まず、現代語の本動詞「かかる／かける」に、まだまだ取り残された用法があること、次に通時的に瞥見しても複合動詞「かかる／かける」に様々な消長が見られるということ。

第一点目から説明すると、

## 〔用例群7〕

27 医者にかかる。

28 裁判にかかる。

29 保険にかかる。

30 原稿が印刷にかかる。

31 魚が針にかかる。

32 敵の計略にかかる。

33 人手にかかつて命を落とす。

34 盗難にかかる。

35 彼は伝染病に罹つて隔離された。

タ 裁判にかける。

チ 委員会にかける。

ツ 機械にかける。

テ 秤にかける。

ト コンピューターにかける。

35などが風邪程度の小さな病にしか言えないというわけでない以上、29などと同様、「作用を受ける／及ぼす」、というだけの、抽象性の高い用法がある、と見るべきであろう。そしてそれは金銭・時間等に関するに言う（用例群8）にも言えることである。

【用例群8】

36 この小包はかなり目方がかかる。

37 二キロまで掛かる秤

38 金のかかる仕事

39 速達にすると二五〇円かかりますよ。

40 完成までには時間がかかります。

41 手間がかかります

42 手数がかかります。

43 人手がかかります。

44 遺産に税金がかかります。

次に第一点目の通時的観点であるが、既に「…かかる／かける」の統語的複合動詞が発生している近世に於いて、本動詞の「かかる／かける」に大小関係が重要な地位を占めていたのか、不明な点がある（注5）。

45 継子も生長しては、掛かる物なるに、むかしより世界の人心、

これをにくも事替はらず。【西鶴諸国ばなし・巻五・執心の息筋】

46 「我は判右衛門があさましき形なり。我がためとて、かたきを打ちに来て、汝が手にかかる事は、これ定まる道理あり。…

【西鶴諸国ばなし・巻三・因果の抜け穴】

47 やれやれ三人の者共が、はやし物で来た、でかひた、是は又めでたひ、某も拍子にかかつてよびいれう

【大蔵虎明本狂言・脇狂言之類・三本の柱】

それぞれのA・Bを取り出してみれば、子（B）に対する親（A）

（45）、敵（B）に対する人（A）（46）、拍子（B）に対する踊る人（A）

（47）は、小さなものと見いだせるが、難しい。

更に、中近世の統語的複合動詞には、現代語の用法の前に、失われたと思しいものが見いだせる。

ナさて、かた様御残し置き候独笑ひの御肌着、十四日にふと御事ども思ひ出し下に来て出申候を、庄介様にもらひ懸けられ、

否とはいはれぬ首尾にて、ころよく進じ申候。

【好色一代男・巻七・諸分の日帳】

ナは、受動的に思える「貰う」と他動的に感ずる「かく」が関わり合う、現代人からは一種興味深いような例であるが、この補助動詞「かく」は或る行為を強く押し出す、或いは持ちかけるような意義であるらしく、この例では庄介が、相手から肌着を貰えるよう、働きかけている、即ち日本古典文学全集の訳で言えば「ねだ」だったのである。こ

ういうものがある訳だから、次のように現代語と共有していそうな例も、実は小さな違いがある。

二 揚屋といふも内あさく表にみえずき、女郎は浴衣染の帷子に  
 中紅の脚布をわざと見せかくる。

【好色一代男・巻五・当流の男を見しらぬ】  
 「みせかける」と現代語で言えば、実際とは違ふあり方を見せるのであるが、二は「見せる」ということをわざと押し出すのであつて、どちらかといえば今なら「見せつける」という方が近い。こうした、その行動を示威的に行うような用法は現代では生産性の高い用法ではない。「勉強している様を示威する」という意味で「勉強をしなける」などとは言えない。だから仮に次のように、現代語でも同様の用法がある場合にしたところで、一語化して残つたものに過ぎまい。

又 「…せめてけふこそ人のおか様並に被を着せて出かけ、暮たらばあの姿をそのまま横にこかして我が世の思ひ出さす事なり。」  
 【好色一代男・巻六・心中箱】

本動詞の方でも、古代から比較的長く続いた(心に)かかる／かける」の用法は現代にはなく、これも「思ひがけず」「心掛ける」等の特定の語彙に残るのみである。

ネ 浦回漕ぐ熊野舟付めづらしくかけて俵はぬ(懸不思) 月も日  
 もなし  
 【萬葉集・巻第十二・三二七】

ノ 唐衣なれば身にこそまつはれめ掛けてのみやは恋ひむと思し  
 【古今集・巻十五・恋歌五・七八六・題しらず・景式王】

ハ …手を摺りて泣く泣く拝みて、それよりこのことを心にかけ  
 て夜昼思ひければ、梵釈諸天来たりてまもり給ひければ…

【宇治拾遺物語・一五四・貧しき俗、仏性を観して富める事】  
 つまり、「かける／かかる」は現代語で多義なだけでなく、通時的にさまざまな用法を生み出し、廃して来たと思われる。その結果、現代に残された用法間で、分岐点の比較的近いものと遠いものがあるとするれば、これらの整理は通時的な観点を元に行う必要があるということになる。その通時的整理を本格的に行う準備がなく、その必要性を指摘するに留まらざるを得ない本稿は、そのための現代語の素描とし、他日複合動詞の展開に関する言及も視野に入れて、このことについて稿を草することとしたい。

注1 以下、挙例の際は「かかる」の例には数字の、「かける」の例にはカタカナの用例記号を付す。

2 朝日新聞社「聞蔵IIビジュアル・フォーライブラリー」により、「朝日新聞」「週刊朝日」「AERA」の記事から「波・津波…」等を五〇〇件ほど検索した。

3 「束になつてかかり、勝った。」のような表現は筆者の感覚では「ようやく」などを伴わない限り違和感が強いが、果たして成り立つであろうか。

4 『基礎日本語』の挙げる「彼は盗難にかかった」という例は、筆者の感覚では非適格文である。

5 近世以前の用例の本文は、次に依った。但し、踊り字を開く等表記を私に改めたところがある。

万葉集：新編日本古典文学全集

古今和歌集・宇治拾遺物語：新日本古典文学大系

大藏虎明本狂言：『大藏虎明本狂言集の研究』池田廣司・北原

保雄、表現社、一九七二

好色一代男・西鶴諸国ばなし：日本古典文学大系

#### 参考文献

『基礎日本語―意味と使い方』森田良行、角川書店、一九七七

『日本国語大辞典 第二版』小学館

また、本稿では複合動詞「かかる／かける」についての言及に乏しいが、考察に際して次の論文を参考した。

姫野昌子（一九九九）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房

菊田千春（二〇〇八）『複合動詞「Vかかる」「Vかける」の文法

化―構文の成立とその拡張』『同志社大学英語英文学研究』

八一・八二（合併号）

渡辺 実（一九七八）『同根の動詞・副詞・接尾動詞』『論集 日本

文学・日本語 5 現代』角川書店、後に「四 意義内項・意義

外項」として『国語意味論』（塙書房、二〇〇二）に所収。

（ほしの よしゆき／本学講師）